

| | |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 総合討論 |
| Author(s) | 原, 洋之介; 立本, 成文 |
| Citation | 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1994), 3: 51-66 |
| Issue Date | 1994-09-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/187428 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

総合討論

司 会 原 洋之介・立本 成文

立本 この2日間の報告は非常に刺激的で、しかも全体として何か関連があるいい話ばかりだったが、各報告の後の質疑応答が非常に短いという事もあり、皆さん少々言い足りなかった面があると思う。冒頭発言して頂く先生方には、そのことも加えて発言して頂き、その際、質問があれば受け付けたいと思う。

まず最初は、山田さんの「地域と生態環境—森林と社会」だが、遅沢さんのコメントでは、生活している人の視点とか改良案とかいうのが出てきたわけだが、司会者の方としては森の文明というふうなところに引き付けて冒頭発言をして頂ければと思う。

山田 遅沢さんのコメントでは、単なる付加価値の創設だけではなく、外からの大きな価値観を持ち込むとか、あるいは文化的なバックアップが必要であるというようなご意見だったと思う。私も当然それを含めてのモザイク性という様なことを考えているわけである。それから、「モザイク性」とか「重層構造」というのは決して静的なものではなく、常に動いているものだという認識を、ちょっと言い逃したと思う。重層構造でありながら、それがダイナミックに動いていて、非常に活性のある社会ができています。外から見れば決して不安定な社会ではなく、それ自体が非常に安定した印象を受けるというような意味で、東南アジアの森林の社会と人間を含め

た森林社会というのが、一つの特徴であるというようなことを言いたかったわけである。

鈴木さんがイスラムに関して、イスラムもやはり重層構造であるということをおっしゃったし、多分イスラムの方はそう言われるだろうと思っているが、東南アジアの森の世界の重層性と、イスラムなんかの砂漠の世界の重層性の差異を少し考えたらどうかと今思っている。

立本 次は加藤さんの「地域性の形成論理—東南アジア都市論」だが、山下さんの質問に対して答えて頂く時間がなかったと思う。そういう面も加えて発言願いたいですが、その前に、セッションで指名されなかった應地さんの質問を受け付けたいと思う。

應地利明 アダットが都市と農村とで変転するというのは少し違うと思う。いわばトレーガー自身によって、ある意味づけを与えられたアダットのある側面が変化していくだけではないのか。例えば、日本で忠孝の精神を高揚させた時期においても、またそれを言わなかった戦後においても、やはり東京の一極集中化があるわけで、そこまで議論が展開できるのかどうか伺いたい。

加藤 まず山下さんのコメントは、王と村の位置関係、アダットとの関係の、いわば重心の移動の問題やイスラムとアダットの関係で議論されたが、例えばトラジャのようなキリスト教化された社会におけるアダットの問題、あ

あるいはイスラム化されなかった社会におけるアダットの問題はどうか考えるのかということについて話してみたいのだが、基本的にはわからない。実は昨日話した「マレー世界」と次のオランダ植民地時代の真ん中のプロセスが抜けていて、もう少しはっきりしたイメージが出てこない、今の應地さんの質問にも十分お答えできないと思う。

オランダは確かにアダット法というものを体系化した、それ以前にアダットが村というものに根づかなかったということではない。15～16世紀にマラッカを中心に受け入れられ発展するようになったアダットという概念は、おそらく17世紀以降、後に我々が村と考える方に広がっていった。特にマラッカの後継者のジョホールのマラッカ直系の血統が、1699年に絶えた後、マレー世界というものが多様化する段階で、ミヤコを中心として概念化されたアダットというものが、よりローカルな色合いを強めていったと思う。その際、ジャワにおいてアダットというものがどういう展開を遂げたかということを理解しなければならないと思っているが、私は、その間の歴史過程について全くと言っていいほど無知で、残念ながらお答えできない。従って、イスラム化されてなかった地域にアダットがどういう形で受容されていったかについても、17、18世紀におけるアダットとのダイナミズムというものを考えなければならないわけで、それ自体一つの大きなテーマだろう

と考えている。

立本 次は中村さんの「地域発展の固有論理—豊かさへの新しい指標」だが、末廣さんの非常に広範な質問に対して、確か中村さんは答えられないと言っていたように記憶しているので、その点も伺いたい。その前に、何か質問があれば受け付けます。

土屋 「民際学」という言葉を出されているが、これは何か一つのディシプリンとして言われているのか、あるいは何かモラルの問題についてのことなのかどうか。私はこの「民際学」こそ地域研究そのものではないか、という印象で聞かせて頂いた。

もう一つ、お答え頂くとかそんな失礼なこととは言えないが、中村さんはご自身のことを何だと思っておられるのか（笑）、民際学者なのか、経済学者なのか、そのへんを自己告白して下さいと有難い。

鶴見良行 我々がやっている島嶼部東南アジアでは、人々は動く。関係性の問題ってというのは、人が動けるから関係性がある。中村さんは商品の関係性だけをおっしゃったようだが、人が動けるということが東南アジアでは非常に重要な大きな要素である。その問題をどうお考えになっているのか伺いたい。

立本 循環・多様・関係というそういうふうな抽象的なレベルで豊かさの指標を考えられるときには結構だが、例えば相互扶助関係が自殺率とどう関係があるんだということになり、貧しさ豊かさというのが相対的なもので

あるとすれば、その指標自体を設定するのがおかしいのではないかと思うのだが。

中村 まず最初の質問だが、私はディシプリンだとは考えていない。むしろディシプリンを持っている人達が、ディシプリンを持つが故に持たない人に対して持っている、ある種の強さと言うか、そういうものに少し疑問を投げるのが「民際学」だろうと思っている。どちらかと言うと、専門を持たない人達が持たないということだけで自由に思考し、発言し、それを文章にまとめるという作業がやりにくいとすれば、それをやり易くするためのお手伝いをする。いずれはディシプリンが無用のものになる時代が来ることを望んでいるが、そう簡単に来るとは思わないので、そちらの方向に向かって少し疑問を投げ続けるというのが、「民際学」の役割だろうと思っている。

二番目に、そういう中村は何者か？というお尋ねであるが、私は、専門家が非専門家に対して大きな力を持っていく時代は、そろそろ限界に来ていると思う。従って少し違う方向を考えなければいけないと思っている人間であり、そういう意味では非常に過渡的な、中途半端な、だから時にはスリランカ研究者の顔をし、時には経済学部の教員の顔をし、時には既存の社会科学に攻撃を仕掛け異議申し立て人の顔をし、というような存在である。

それから指標を具体的にとりあげると、い

ろんな問題が出て来るということは、私も気がついている。仮に提案した六つの指標についても、一つ一つ議論していく必要があると思っている。本来、ここにも学問なるものの性と言うか、なんらかの形で基準を設け比較をしたいというそういう力が働いている。現にまた、そういう指標がいろんな国際機関、国内の機関で作成されつつあるので、それとはやや違った異議申し立てに近い指標を作っていくという程度の作業であって、これが確固たるその地位を持って揺るぎのない基準として全世界に流通するとなると、これは私の意図とは全く違ったことになるので、怪しいなと思われる状態が一番適切ではなからうかと思っている。

最後に、鶴見さんのおっしゃる関係性という問題だが、商品は多様に展開するし、それが文化の担い手である商業はもっと高く評価されなければならないという私の意見は変わらない。しかし関係性の最も中心的なところは、やはり人と人とが広く交流できるということ。そして、私達に重要なモデルとして人と人との結び付きのあり方を教えてくれているのが、東南アジアだろうと思う。彼等はお互いに国家や国境というものに限定されないで長くつき合ってきた。もし植民地支配による国境線の画定なんてものがなければ、まるで違っていたであろう、そういう多様な関係、多様な交流のあり方、それが私達のお手本であろうかと思っている。

立本 次にBグループに移りたいと思うが、私は今まで聞いて思うのは、やはりAグループとBグループというのは、焦点の合わせ方、方法が若干違う。Aの方は、「地域の文明性とは何か」というようなことに焦点を当て、しかも地域という概念が非常に小さい小地域、時にはコミュニティを想像するようなそういう関係。方法論的に言えば、輪切りのというような印象を受けた。Bの方はむしろ、「外文明と内世界」ということに焦点を当て、その文明性あるいは世界性というものを論じていた。変容パターンとかイスラム化とか、むしろそのプロセスに重点を置かれたというような印象を受けて、その点でも関本さんの「内世界」をヴァナキュラーの規範化の過程として捉えるというその視点、結局、「内世界」というのは一つの空間というようなものでなく、過程として捉えるのだが、それも一つの視点だと思う。

そうすると、もう一つの「外文明」の方も文明ではなく、シビリゼーションあるいは、文明化とかいうふうに捉えるのがいいのではないかと思う。と言うのは、「文明の地域性」というのも皆さん色々ご意見があると思うが、例えば『総合地域研究』の第2号の、「文明と地域性」のように、文明と地域性とは全然違うものである。だから「文明の地域性」とは、それがないということを証明すればいいという、そういうふうな立場もある。

またいみじくも古川さんが、文明とは複数

か、単数かというふうにおっしゃっていたんだが、諸文明の地域非拘束性というのは、これは当り前の話である。なぜなら、地域研究というのはもともと、普遍である文明を否定して地域研究というのになったはずであるからである。諸文明の地域性という考え方と、そうではなくて、文明というのはすべて普遍で単数だという考え方がある。だから、大きくは3つに捉えられるわけだ。先ほどの、文明化というのはむしろ「文明化の地域性」、そういうふうなプロセスということになる。

そうすると「文明化」と「地域化」というのは非常に曖昧模糊とし、ある点では同じである。例えば、「文明化」と「文化化」あるいは「文明化」と「地域化」はどう違うのかというふうな議論になるが、一応プロセスとして、今後我々が考えていかなければならない点だと思う。

それを踏まえて考えた時に、関本さんが一番最初に地域研究の方法の限界と言われたが、それは具体的には何を言うのか、単なる地理的区切りが悪いのか。地理的区切りも、地域研究の成果としての区切りと、地域研究のはじめの手がかりとしての区切りという面があるが、そういう点を抜いても、もし関本さんのように「内世界」を過程として捉えたときに、それでも地域研究の方法の限界がそこに現れてくるのかという点を伺いたいと思う。司会者が少し喋りすぎたようだ。では、関本さんお願いします。

関本 私が話したことがどういう意味や価値があるのかは全くわからないが、スリナムのジャワ人の研究をして一つはっきりしていることがある。それはある土地に、本来のものとして定着しているような「文化」も、ある歴史過程の中で権力作用、規範化の作用の結果として現われてきているものだということだ。そういうことを映し出すという点では意味があるだろう。とりあえず、ここの議論のためにもう少し話を広げて思いつきで話をすると、この種の事実は世界を地図上で面に区切ることから出発するような地域研究の中の、ある方法の限界を明らかにしてくれるものかもしれないと考えたわけである。

弘末さんもコメントでおっしゃっていたが、本来しかるべき場所にいるというふうな主張ができない人間をどう考えたらいいのか。そのような人のことも考えてあげないといけない。あるいは、ある地域に本来根ざしているということは、どういうふうなことなのかと、それを考える必要がある。それはある種の理想状態に描かれることもあるが、やはり何か政治的な権力作用の結果の場合もあるだろう。そういうことも考慮していろいろ考える必要があるわけである。

例えば、中村さんのおっしゃるような指標でスリナムのジャワ人が幸せなんだろうか。恐らく、お話を伺った限りでは、意に反して移住するのは不幸せなんだろう。スリナムのジャワ人自身を見てみると、教育のある人

は、ある種の疎外感と不幸な思いを持っている。それ以外の人に「おまえはここで暮らしていて不幸か、幸せか？」と聞いても、「まあそう言ったって、ここはおれが住んでいる所だ」と言う以上のことではないわけだがやはり本来、居るべき所に居るというのは、これは幸せなことであると一般的に考えられる。では本来居るべき所の本来とは何か。例えば、アメリカの白人はアメリカ合衆国の土地を、神聖な本来居るべき土地だと思っていると思うが、いったいそれはどういうことなのか。ある地域に根ざした、長い歴史や伝統を持ったということが、へたをすると理想化されてしまう。実際にはそれらは多くの場合、世界史の中の政治的な力の結果で、勝者と敗者のそれぞれの立場でしかない。そういう微妙なズレに気をつけておかないと、地域を語るということ自体が誤りになる。現状肯定的な政治性を持ってしまう可能性が出てくる。実は私もよくわからないが、地域研究の限界とは今言ったようなことだろうと思っている。

一方、スリナムのジャワ人について、世界資本システムの作用の結果であるという見方がある。それはそれで正しい。毎年ジャワからの移民数の変化も、それこそロンドンやニューヨークなんかの株価の動きと密接に関連しているはずであり、そういう研究はそれとしていいんだろう。だが、それだけで語っていくスリナム・ジャワ人研究というのは、なんともつまらないと言うのが私の考え方

である。自分が地域研究にひかれる由縁である。にもかかわらず、何か地域を物神化して、私の研究している地域はこんなに素晴らしいんですと語ってしまいがちなところには危険がある。特に近現代史の現実みたいなものを切り捨てたら、まずいだろうと思っているわけである。

立本 地域研究の方法の限界というのを特にとりあげたのは、私共は地域研究というのはオールマイティではないけど、アンチテーゼとして役に立っている。その際にやはりオールマイティではない方法の限界というのを認識しておかなければならない。関本さんの発言は非常に卓見だというか、私共も気をつけてなければならぬということできりあげさせて頂いた。

古川久雄 地域研究の面白さというのは、小説より奇なりというようなところがいっぱいころがっているところだ。それを切り捨てないこと、それにくっついていくというのが、切り込んでいくための方法だろうと思う。その点では中村さんに対する不満を感じた。豊かさとか貧しさを指標で表すというのは、まさに今のワン・シビリゼーションのたいへん悪いところだと思う。それを抜本的に止めてくれと言わないといけぬ。人によって何が幸か不幸かは本当は分からない。

こん畜生と思って頑張っていた、精神が燃えていた、そういう状況がある時あったら、それはたいへん豊かなものだったかもしれない

い。そのへんが何かきわめて相対的なものであって、それを何かある形に表現するのは難しい。進歩ですよとか、良いことなんですよと普遍的なタームで言うことに対する懐疑を直接投げつける。そういうふうに僕は言ってほしかった。

立本 小島さんは、日本文明化のパターンについて語られた。日本の文明化と西洋の文明化とどう違うのかと言う討論をしだすたいへんな問題だが、後藤さんの、もっと広いパースペクティブでというコメントもあったので、そのあたりも踏まえて、捕捉をお願いする。

小島 日本というものも、「日本文明」として捉えると、外文明というものを巧みに内世界化してきた国だと思う。これはよく言われるように、八百万の神などというそういう多様な文化を受け入れる素地がもともとあり、その上に生きとして生けるものの共生という仏教的な考えが入っている。さらに人間の縦の関係を識別する儒教というもの、加えて近代の科学技術などの西洋文明というものが上に乗っている。それを巧みに状況適応的に使って国家を形成してきた歴史があると思う。

ここで教育と言うものを考えてみると、これはそういう政治や経済、軍事に従属していると思う。特に戦前は政治・軍事の完全な従属して教育があったと思う。教育というのは子供の将来を考えるので、より一層、状況適

応的になりやすいということがある。

最後のまとめで言えなかったが、他方で「相互性」というのがある。学ぶ人がいなければ教えられない。植民地教育でも押し付けたという見方もあるが、一方では、それを受け入れる人がいなければ押し付けることもできないわけだから、部分的ではあれ、相互的である。現地の平等主義的思考を取り入れて、教育の現場ではかなり平等的にやっていた現実もある。多面的かつ重層的に見ていく必要があると思う。

重要な点としては、異文化の中での教育理論の形成がなかったということが一つあると思う。これは今日でも言われているが、だいたい同質的な子供達を対象にした教育理論しかない。親の都合や、国の都合等によって教育理論を組み立て、その子供自身の持ち味や、本当に子供自身にとって何が為になるかという、子供自身からの視点が欠落していた。そういう意味で、日本文明の地域性は、状況的だ。外から見るとわからないような柔軟性を持っている。

後藤さんから適切なコメントを頂いたのでそれに答えたいと思う。まず現地の日本人会や宗教教団との関係はどうであったのかという点だが、全般的に見ると、日本人会と日本人学校は直結して、日本人会のだいたい6割の財政は学校に使われていた。今日も子供の教育のために日本人会があると言っても過言ではない。ただ日本人会の会報であるとか、

日本人会の役員がどういうふうに関わったかという点については、はっきりしていない。今後より一層調べていきたいと思う。宗教教団については、いろんな宗派の開教使が開教に出て行くわけだが、南洋は開教という点ではやりにくかった。なぜなら檀家制度もないし、在留邦人が少なかったために、行っても生活が成り立たなかった。もちろんダバオのミントル女学院のように、東本願寺の開教使が女学院を作るという事例もあったことはあった。これもまた調べていきたいと思う。

同一論者、同一雑誌における変遷はどうかであるが、全国雑誌を見る限りでは、単発的な教育論が多くて論争らしい論争がない。当時の言論統制とか、あまり討論を好まない風土が関係しているのではと思う。

立本 次に鈴木さんが、これはかなり大きい問題で、恐らくは総合討論の本題の方へつながっていくのではないかという予感がしている。「文明」の定義をした方が良いのか、しない方が良いのか、私など、文化も文明もいいかげんに使っているのだが、イブン・ハルドゥーンの「ウムラーン」と「ハダーラ」というのは非常に感覚的にわかりやすい。それに対して鈴木さんが定義した「文化」と「文明」、これは全然違う。一方は特殊性で他方は普遍性だと言われたが、特に「文明」の方の定義で、内的制御能力と言われた。例えば、内的制御装置と言うと、我々文化人類学から見ると、すぐ慣習とか法律とか世界観

とかいうふうなものをイメージするわけだが、それはとりもなおさず特殊なとすべき「文化」である。そして能力という言葉を使ってられる。そうすると、その「文化」の行為の癖という、人間の方に戻ってしまう。

「文化」と「文明」の違いは、集団の癖と人類の癖という、それくらいのものになってしまうのかなというふうな印象を持った。

「文明」をどういうふうに考えるかということについてももう少しコメント頂ければと思う。

鈴木 従来、文明と文化の二元論を行う時、多くの場合、技術的なものを「文明」とし、それに対して、宗教や思想等を含む精神的なものは「文化」とであるというふうな分け方が多かった。

私は「文化」は「外的制御能力」といった。ここでも「外的制御能力」と言う場合には、外的な環境世界に対する知識と、それを利用したり制御したりする能力の総体ということを一応考えている。

それに対して「内的制御能力」と言うのは民族なり集団の癖と言うふうに考えているわけではない。私の場合、ノルベルト・エリアス発生心理学と社会文化史の研究者の『文明化の過程』という業績にのっとった形で考えている。彼は、人間の攻撃衝動を内在的に抑制していくメカニズムが次第に出来上がっていく過程を、文明化の過程として捉えている。彼は西洋文明について実証的に社会文化

史的な研究をやっているわけだが、中世から近代に至るまでの時期に、攻撃衝動を内面的に制御していくメカニズムが、社会全体において形成され作動するようになっていったと言っている。

私自身も、「内的制御能力」という場合には、攻撃衝動を内面的に抑制する制御能力として捉えている。そしてそのような内面的な制御のメカニズムに基礎づけられながら同時に、環境世界を制御し、同時に開発し、負の様々な要素をも制御する可能性を次第に現実のものとしていく能力、その総体を「文明」と呼んではいかがかと思っている。そこで「文化」の方はあくまでも集団が持っている癖である。従って累積的な蓄積は困難なものである。個々の文化においては、おそらくは粗雑化と洗練化としかない。これに対して、制御能力の総体すなわち「外的制御能力」と「内的制御能力」の総体は、累積可能な性格を持ったものと言える。「文明」と「文化」の区分については、とりあえず以上である。

先ほど家島さんのコメントで、なぜオスマン帝国の場合だけ非常に長期に渡って存続し続けたのかという質問があった。これもある文明の中における、ある地域の特性に関する問題でもあると思われる。家島さんもイスラム世界というものを想定されているが、私もだいたい同じ様な広がりでもイスラム世界を想定している。私自身の話題提供の中でもふれたように、その中でも、いくつかの地域があ

る。

中央アジアからイランにかけての地域と、それからマグレブ地域、それに、中東地域は、かなり構造が違っている。山田さんから東南アジアの森の世界の重層性と、砂漠を中心とした中東の世界の重層性とは、かなり違ったものであるのではないかという指摘を頂いた。確かに、中東世界の生態系と、そこにおける生業のシステムとの組合せによる重層性は違う。文化や宗教の話はよいとしても、ここには別の種類の重層がある。例えばここには三つの生業形態、都市民生活と農村農民生活と遊牧生活がある。それは一つの地域内で棲み分けて、とりわけ農民と遊牧生活の場合には、場合によると同じ地面の上を時を分けて使い分けているという形の重層性が実現されている。この中でもとりわけ都市と遊牧の力関係は、同じイスラム世界の中でも随分違っている。そして、その力関係の違いが、先ほど家島さんが問題にされた「ハダース（文明）」の持続期間の問題とつながってくるかと思われる。中央アジアから、イランにかけての地域においては、この3つの生業形態が競合している。伝統のある都市でも、遊牧が都市に対してかなり強い力を持っているところが多い。

マグレブの場合も、違った文脈ではあるが、やはり同じことが言えるかと思われる。イブン・ハルドゥーンの「ウムラーン」と「ハダース」の理論は、やはり基本的にはマ

グレブの地域的な特質と、歴史的な経験に基づいて成立したものであるかと思う。これは実はイスラム世界の最中心部であるシリアからエジプトについては適用し得ない。そして後に、イスラム世界の最中心部となっていたアナトリアにも適用できない理論であると言っていると思われる。

イラク、アナトリア、シリア、エジプトにかかる地域においては、3つの生業形態が重層的かつ複合的に存在しているということはあっても、とりわけ拠点都市の力が圧倒的に優勢な形になっているということにあると思う。オスマン朝が、多くの王朝に比べて非常に長期間に渡って存続し得たことのまず第一の理由は、やはり、都市に、しかも巨大都市にとって有利な地域に成立した王朝であると言うことが大前提であったと思う。

第二の理由としては、当時の国際情勢のあり方にかかっていた。ちょうどオスマン朝が出てきて、基礎を固めた時期においては権力の真空状態がその地域にあったということだと思われる。新しい新興勢力が辺境から出てくるのを完全に阻止するだけの、強力な統一的政治勢力がその地域に存在していなかったということが一つの条件であり、しかも真空状態と言っても、辺境から出てきた武力集団が急速に拡大することを阻止できるだけの力を持った断片的な諸勢力が存在していたという第二の条件があり、ちょうど適度なこの2つの条件の元で、台頭は許されるが急速な台

頭は許されないという形で、徐々に組織固めを行いながら政治権力を固めていったことが持続的な発達を可能にした。

第三の理由は、東西の交易路のとりわけ陸路の非常に重要な接点に当たっていたこと。シルクロードの末端の一つであるアナトリアの西北端を抑えたということは、同時にユーラシア及びアフリカの三大陸をつなぐ東西交易路の北半分の最も重要な地域を抑えたということでその意味は大きい。そこで得た速攻性のある経済力が権力のコアになった。家産制的で小規模ではあっても、君子直属の軍隊を早期にまとめた形で形成することを可能として、それが上の国際的環境の中で、非常に強力な将来の組織的発展のコアを作り出していたのではないかとと思われる。

第四に、これは文化的な重層性の問題に関わるが、イスラム世界の中で、ビザンツ的な要素と、古代オリエント的な要素との複合の上で現実には権力機構を作り上げた。その三つを比較的自由的な形で取捨選択して取入れながら、組織形成を行っていったということが、もう一つ重要な要素になっていると思われる。

原 先ほどから聞いていると、どうも3つくらい問題があるように思う。まず「文明の地域性」という概念をめぐる問題。これはいわば表の問題であって、実はその裏に2つ問題がある。ひとつは「個別のディシプリン」を守っていることがいい事かどうかという問

題。「地域性」などを考えるときに、学問の範囲、ある種の利益集团的な形で出来上がってきた学会というものに仕切られた問題に固執しては駄目なんではないか。そういう問題がある。3つ目は、なんで今ごろそういう議論をする必要があるのかという問題がある。この3つのレベルの議論を今日やるというのはとてもできないし、四年かかってなんとかできればいいということだろうと思う。

ところで、先ほど中村さんに対して古川さんから出た問題だ。まず、これからとりあげたい。多面的で、いろんな価値観が含まれた「地域の個性」というものを、ある種の統計値に直すという作業は、本当に意味があるのかないのか。直すことによって、かえって悪くなるんじゃないかという問題。これは多分、特に私のように「経済学」を学ぶものにとってはえらく急所を突いた質問なんだが、中村さんに答えて頂けたらと思う。

中村 私も古川さんのご意見と目指しているところは全く同じである。但し違うのは、今経済学帝国と言ってもいいくらい、経済学が大きな力をふるっていて、GNPによっていろんなことが議論されている。国際的にもいろいろ国をランキングづけしたり、それに基づいて費用を作っているという事実がある。

こういう考え方が猛威を奮っているさなかだから、そういう諸々の指標が無意味であるとただ言っているだけでは、あまり力にならないので、ひとつ古川さんの目的を達成する

ためにも、それに代わりうる指標なるものを提示して、指標化の営みの愚かしさというものをお互いに共有できるようにする、そういういわば過渡的な、あるいはパロディー化の試みとしてやっているだけに過ぎないのだ。

それから関本さんのご指摘で、他地域への移住というのがあり、私のレジュメには〈経済苦による他地域の移住〉と書いている。実を言いうとこれは、サラ金による自殺や蒸発のことで、「蒸発」と言うのは、いかにも社会科学に馴染まない言葉である思い、いかにも社会科学らしく「移住」など書いたのだ。逆にそういう試みこそ間違っていた。やはり『警察白書』通り、「蒸発」というふうに言うておくべきだったと反省している。

原 時間は残り少ないが、今からいろんな局面で討論して頂きたいと思う。應地さんお願いします。

應地 総括班の方達が、非常に巧みに話題設定を下さり有難かった。「文明の地域性」というテーマは、どちらかと言えば「内世界」の形成というものをめぐる議論であるが、昨日の話題は森林や、アダットや、現代の経済を考えるような議論であった。そして、どちらかと言うと、その「地域性」というものを形成すべき原単位はいったい何かという点に力点があった。森林の場合だって、ある共生空間をつくる何かがあって、それがあある単位をなしているとか、あるいはアダットのお話でも一つの地域統合体みたいなもの

が指摘されていたし、中村さんはもちろん日常生活圏的な範囲の中での議論を展開してらっしゃった。そういった意味で言うと、「属地主義的」な原理における「内世界」の形成原理を述べられたような気がする。

今日の三つの話は、いわば「内世界」から外にいる人達、理由はなんであれ、はみ出した人達のいわば「属人主義的」な意味でのアイデンティティをどうするか。そしてそのアイデンティティの上に立ってどういう「内世界」を作るか。そういう意味の、何か「属人主義的」な原理によるところの「内世界」形成ということをめぐるいくつかの局面の議論だったと思う。その2つの原理の中で、このシンポジウムが構成されたような気がして、総括班の課題設定の巧みさに感心しています。

原 どなたかこのテーマを構想されたときの裏話でもして頂ければ有難いのですが。

山下 それに行く前の話だが、先ほどの関本さんの問題提起で地域研究の限界という言葉で展開されたいくつかの議論を興味深く聞いたわけだが、例えば昨日のアダットの問題でも、現代のインドネシアの中でアダットが観光開発の対象になる。つまり、アダットが本来の場所から離れていけば商品になったりするという局面があると思う。それから別にスリナムまで行かなくてもトラジャの子孫がウジュンパンダンに行く。ウジュンパンダンからジャカルタに行く。ジャカルタからサバに行

く。そしてサバに行ってトラジャのことを考える。そしてそこでは「地域性」がいわばノスタルジーの中に現れ、語られる。

関本さんの言ったことと同じだが、鶴見さんの言葉を使えば、移動する中での地域をどのように捉えるか、あるいはその前の「地域性」が、いわば実体的な地域概念ではなく、例えばノスタルジーの中の地域概念になってしまう。そういうふうなことをどの様に考えるか。それは地域研究で扱えるものなのか。もちろん答えはないけれど、問題としてちょっと確認しておきたい。

原 またこれをめぐって議論すると大変だと思う。他の先生方で何かありませんか。

友杉孝 昨日の趣旨説明で高谷さんは「文明の地域性」ということについて、「文明」とか「地域」というものの定義はいろいろあるということで話が終ってしまい、結局、このテーマがどの様な趣旨であるかということ、話の途中というか、その前に終ってしまったという印象を受けた。「文明の地域性」ということであるから、そもそも文明は地域性を持っているということで話がスタートしているかのように見える。インド文明であれ、中国文明であれ、そういったひとつひとつにの名前が付いているわけだが、もし文明の「地域性」があるとすれば、その「地域性」は何によってもたらされているのかとか。あるいは、先ほどの鈴木さんのお話にあったように、「文明」というのは、人間の

外的な世界とその間を調節する能力であるのかとか。そういうのであれば文明が発達すれば外的世界との関係性も変わってしまうわけだから、地域性はなくなってしまうのか。その極限と言うか、発達の最終段階では、文明は地域性をなくしたと理解してよろしいのだろうか。いろんな問題が総論としてあるかと思うし、また例えば、文明の単位と言わないで、なぜ「世界単位」と言うのか、など、高谷さん自身の言葉で説明して頂ければ、全体が非常にすっきりするのではないだろうか。高谷 最初に主旨説明でも申し上げたように、この「文明」も「地域性」も、概念がはっきりせず、実は困っているというのが正直なところである。この「文明の地域性」というタイトルは、さる長老教授が与えて下さったテーマであるが、実に難しい課題だ。ただ、我々は「文明」という普遍的なものがあって、そのローカル版があるという、そういうふうには考えていなかった。

先ほど立本さんはうまいことを言われたが、「文明化の地域性」、まさにそこである。彼がそう発言したのを聞いて、「ああそうだ、そうだ。そういうことを私共は考えていたんだ」なんて思っていた。だから会議が終る頃になって趣旨説明をさせていただきます（爆笑）私共は実際には「文明化の地域性」みたいなものを考えていたんだということである。

ところで、この「文明化の地域性」という

ものを取り扱うときに、考えておいた方がいいんじゃないかと思うことは、つい先ほども、どなたかが、「属人的」とか「属地的」とか言われていた。あれが重要じゃないかと思っている。「属人」と「属地」、これは私はずっとはイスラムの片倉さんから初めてお聞きしたんだが、そこの所を少し話題にしていだけないだろうか。

原 今、話題に出た片倉さんお願いします。
片倉もとこ この総合地域研究が発足した時から、いわゆる私は「地域研究」はもう地域研究では段々なくなっていくんだろうなあと思っていました。昨日中村さんが新しい産業分類をして下さったのを聞きながら、地域は地域から離陸していくんだと考えていたのです。第一次産業はたいへん属地的で、第二次産業は低空飛行くらいだけれどだいぶ離陸して、第三次産業になるともう地球の裏側までいってしまうという、そういうふうな理解をしていました。

ただ離陸の仕方が、地域によって違う。さっきからお話に出ている中国文明、インド文明、エジプト文明など、過去の文明は地域の名をかぶっているのですが、イスラム文明だけは地域名ではない。イスラム世界はかなり早くからいわゆる「地域」から離陸していた文明と言えるのかもしれない。

ここには、中東研究者と東南アジア研究者が多いようですが、この両地域に一番関係しているのがイスラム文明でしょう。イス

ラムというと「中東」ということになりがちですが、絶対人口からすると東南アジアの方がはるかに多い。同じイスラム文明圏であると言っても、トルコとかイランは地域性が強かったと言えるのではないのでしょうか。イスラム文明化する時に、文化的な要素であるアラビア語は取り入れなかった。イスラムの文明的要素だけを取った。

弱いとか強いとかいう言葉は、あまりいい言葉ではないかもしれないが、地域文化が弱かった所とあえて言うが、そういう所はアラビア語もアラブの風俗・習慣、いろんな文化を全部取り入れてしまった。そういう視点から見ると、東南アジアはよく言われる「弱い空間」ではなく、地域性が強い所だといえると思う。「内世界」が厳然とあって、地域文化が強く、それはそのまま残しておいて、イスラム文明も取り込んだ。そこで、昨日お話があったアダットというものもイスラムとともに現存しているのだと考えられます。

原 今日あまり出てこなかったが、この重点領域のキイ・ワードの中で、強い空間とか、弱い空間とか、僕にはよくわからない概念が使われています。何かこのあたりで、今の片倉さんの東南アジアの地域性の性格づけにコメントないしレスポンスされる先生がおれば、一言お聞きしたい。

坪内 「地域性」の強い、弱いと言う問題が今出てきた。この間、別の会合をやった時に、「文明と地域性」という形でこの話が出

た。その時の「地域性」が何かという考えも含めてもう一回考え直してみる。その場合、東南アジアを考えるとときには、やはりどうしても生態基盤とか、そういうふうな地面から順番にものを考えていこうという態度が強かった。

これに対して、インドの場合どこから考えていくかと言うと、例えばカーストなど、社会制度の特異なインド的な形を中心に考えていこうとする傾向が見られた。さらに「中東」あたりでは、何処までも広がるイスラムというのは、どういう役割を演じているのであろうかという形の発想があったかと思う。

そうすると、今の「地域性」が強いと言う片倉さんの話だが、それでは「地域性」はいったいどこから捉えるだろうか。「地域研究」を考える時に何処からスタートすればいいかというところへ再び戻るわけだが、今の片倉さんの発言の意味を生態基盤の意義に置き換えてみると、地面からスタートするような地域研究のスタイルと、そうではなくより成熟した社会から出発しなくてはならない地域研究というふうに、別のところに焦点を当てて出発するのがふさわしい地域研究があるのではないか。地域研究に種類があるのではなかろうかと思いながらお聞きした。

これは当然今日結論を出すような問題ではなく、今後まだ3年と数日あるので、そこまで頑張ってやるべき問題であろうと思う。

原 要するに東南アジアというのは、生態学者が威張れる研究領域である。インドに行くと社会学者が威張れる。中東に行くと何でしょう？どうも経済学者の出る幕はなさそうである。

確かに「地域の個性」というのがある。なんとなく区切られた場所において、生態がそのありようを決める重要な部分であるような単位、社会の制度が重要になりそうな単位。そして、それらとはまた別な性質の単位がある。いろんなバリエーションがありうるということになってくると、どの地域を研究するかによって威張れる学問のフィールドが違ってくるのかなぁという気もしている。これは僕の勝手な感想である。

加藤 東南アジアは地域性が強かったのではないのかと言う片倉さんのお話だったが、東南アジアは、おそらくペルシャとかトルコのような、高谷さんの言葉を使えば自形的な文化、要するに俺が偉いんだって頑張っているような地域性ではないと思う。むしろ私が考えているのは、よく中華文明とインド文明、あるいは西の文明に挟まれた、境界にある地域ということが言われているが、そういうものだと思う。ただ、それを積極的に評価すれば、両方から比較的自由に自立性を持って、それこそ外文明を消化できるようなそういう地域ではなかったかと私は捉えている。

例えば、イスラーム文明を取り入れるときにも、トルコやペルシャの自形的な形での対

応ではなくて、高谷さんが言うところの他形的な対応をしたのだと思う。なおかつ文明の中心地から地理的にも遠いという、比較的自立性が可能であったような、そういう状況の中で、昨日のアダットにしても東南アジア島嶼部の現実というものと、対応しながら変化が起こったのかなと私は解釈している。

立本 「属人主義」と「属地主義」だが、私もこの問題は考えようと思っていた。まず、人を中心に考えるか、地を中心に考えるかという問題がある。その時の主語が問題だ。人が地に属す、地が人に属すとするか、人を属させる、地を属させるとするか、いろいろなバリエーションがある。どういうふうな属人主義・属地主義をとるかということで東南アジアも変わってくると思う。

先ほどの應地さんがおっしゃった原単位という問題もある。Aセッションでやったような小さい単位、中村さんの車で行って帰ってこられるような範囲、そういう原単位の話になると、東南アジアというのは地が人に属すということになる。これは「属人主義」と言うのか「属地主義」と言っているのか分からないが、とにかくそういう面がある。そうではなくて、もっと巨大な地域をとると人が地に属すという面がかなりあると思う。

しかしそれにもかかわらず、東南アジアという世界を全体として見ると、やはり人を中心に考えているのではないだろうか。地を中心に考えているのではない。そういう意

味では「属人主義」ということで、中東の仲間に入れてもらえないかなと前から思っているんだが、どうだろうか。何か言うと片倉さんは、「いや、東南アジアは属地主義」とおっしゃるんで（笑）、それをもうちょっと詰めて考えたいと思っている。

片倉 「属地主義」とか「属人主義」とか言葉だけで考えると、立本さんが言われたようにどっちがどっちだか、いろいろなふうに見えるんですね。私が属地主義とか属人主義とかいう言葉を使い始めたのは、高谷さんの、世界観を共有するものを束ねて一つの単位とすると言われたところからで、世界観を共有するのに、属地的に共有する場合と、属人的に共有する場合があるということです。

要するに「属地的価値観」「属人的価値観」というふうに申し上げたわけです。属地的価値観の場合は、その地に行くのだいたいそこにいる人は同じ様な世界観を持っている。今までいろいろなことを聞いた限りでは、東南アジアは「属地的」です。もちろん個々人で考え方が違うということもあるでしょうが、しかしこの土地へ行けば、だいたいこういう言葉を喋っていて、こういうふうな考え方をしているというイメージがあります。

それに対して「中東」の場合には、一つの所にじっとして生活していけるほどの豊かな生態系がないということもあり、常に移動しています。世界観や価値観も、人とともに移

動する。ある一定のところに行っても、皆が
だいたい同じ考え方をしているというより
は、てんでばらばらというところがある。
もちろん時には政治的に結束するような
こともあります。ふつうの時はみんなばら
ばらで、価値観が人に属している。そういう
意味で「属人的」とか「属地的」ということ
ばを使ったのです。

原 今のお話を聞いていると、もっとフロン
ティア空間だとかいろんな事を、議論の中に
参入させたかったんだが、時間の関係でそろ
そろ終わりにしなくてはならない。

私には議論を要約する能力はないが、今か
ら数年前、この部屋の中で、やはり重点領域

の一つのシンポジウムを開いた。それは今日
と同じ様なタイトルで、「イスラムの都市
性」と名づけられていた。

今回は「文明の地域性」で、都市より地域
の方がどうも広そう。イスラムも文明の一
つにすぎないと先ほど指摘があったが、今回
のシンポジウムで、〈の〉でつながれた二つ
の概念はともに前のものより広く大きなもの
となっている。私は、進歩主義者ではない
が、やはり我々の学問は進歩しているんだ
なァという、そういう感想を持った次第であ
る。こういうことで、ここでこのシンポジウ
ムを閉めさせて頂きたいと思う。ご協力有難
うございました。